

Series

私の漢方診療日誌

No.121 女戦士の強い味方 受験時のアガリ防止に女神散』

梅雨時までは“春の女神”が訪れる季節でしたが、梅雨があけた夏休みは、受験生にとって勝負の季節です。がんばっている彼女たちに、少しでも力になれるように、漢方薬で援護したいものです。

最近は少子化が叫ばれていますが、受験の厳しさはむしろ増しているのではないかと思います。また、試験形式の多様化で、筆記だけでなく面接試験を取り入れる学校も多くなっています。日頃からとても良く勉強し、知識もしっかりあるのに、いざ面接試験となると緊張してしまって日ごろの実力が発揮できないお子さんがいます。それどころか、知らない人の前では声がかすれたり、手が震えてしまうことさえあります。そんな女の子たちにぴったりなのが、女神散（ニョシンサン）(TJ-67)です。

中学三年生の Y ちゃんは、はきはき話すしっかりしたお嬢さんです。勉強もまじめに一生懸命やっています。しかし、試験になると緊張でお腹が張り、途中でトイレにいかねければならなくなるそうです。無理に我慢すると問題を解くどころではなく、前回の数学のテストでも問題の解き方は分かっていたのに、お腹の具合が悪いために問題を全部終えずに退室してしまいました。

腹診では、腹直筋が張っており、お臍の上には動悸も触れます。また、脈が弦を弾くようであり、肝の気が滞っていると考えられました。お腹の症状に対して加味帰脾湯(カミキヒトウ)(TJ-137)を 1 包ずつ、朝晩飲んでもらい、女神散を試験当日の朝、頓服で使うように渡しました。

その結果、落ち着いて試験を受けられて結果も上々で、以前から希望していた名門の女子高を受験することになりました。その高校は、筆記試験だけでなく、面接試験もありましたが、女神散の頓服で無難に切り抜け、春から希望の学校に進学することができました。新学期が始まってしばらくは慣れないためか体調が悪かったのですが、梅雨明けからは病院へ来る必要もほとんどなくなりました。さらに、楽しく充実した学生生活を送り、ロンдон短期研修へも元気に行ってきたそうです。

ところがその後、彼女は高校 3 年の冬になって久しぶりに病院に顔を出しました。今度

は大学を受験するので、あの時の薬を欲しいということだったのです。



女神散は、もともと安栄湯（あんえいとう）という「軍中七気」を治療する薬でした。戦場での恐怖と緊張状態の中で「喜ぶ、怒る、憂う、思う、悲しむ、驚く、怖がる」という 7 つの心理、あるいは感情が乱れた時に使われたのです。たとえば、瀕死の刀傷を受けて錯乱状態の兵士を鎮めるのに効果があったそうです。この時、戦場ですぐ使えるように、生薬を布の袋で包み、お湯に振り出して飲ませたと記録にあり、現代のティーパックの元祖ではないかと思われています。

また、槍で敵陣に飛び込む足軽の武者ぶるいを止めるのに使われたとか、噂では先の戦争で神風特攻隊員が出撃の前に飲んだという悲しい歴史もあったようです。

そんな薬がなぜ女性に使われるようになったかという、戦国時代が終わり、失業しそうな従軍の医者が、刀傷の痛みにも効くから、出産の腹の痛みにも効くだろうと使ったのが始まりと言われています。浅田宗伯（あさだ そうはく）先生の勿誤薬室方函口訣（ふつごやくしつほうかんくけつ）にも、「此の方は元、安栄湯と名づけて軍中七気を治する方なり。余家、婦人血症に用ひて特験あるを以て今の名とす。世に称する実母散、婦王湯、清心湯、皆一類の薬なり。」とこうしたいわれが書かれています。

本来は、戦士など実証よりの人に使うべき薬ですが、TJ-67なら大黃が抜いてありますし、1回のみのお頓用ならよほど虚証でない限り使えます。また、胃腸の弱い方なら加味帰脾湯など脾胃を保護する漢方薬を併用しても良いと思います。

現代の受験も、戦闘方法が刀や槍から鉛筆に変わっただけで、七気を乱す点では戦争と同じです。女神散は、けなげに戦う女戦士に是非使っていただきたい処方と言えます。また、試験ではありませんが、楽器の習い事やクラブ活動でコンサートの舞台に立つ時、緊張するお子さんもいます。たとえば、フルートの独奏、サクソフォンの独奏で指が震えるという訴えに女神散は大変効果があります。晴れ舞台で七気が乱れている場合にも重宝する処方といえます。

ところで、困っている女の子には手を差し伸べるのに、男の子はどうするのか、えこひいきじゃないかというご意見もあるかもしれません。女の子にしか使わない理由は、効能・効果をご覧いただければ分かります。そこには、「産前産後の神経症、月経不順、血の道症」としか載っていません。残念ながら、現在の保健診療下では女性専用の処方なのです。